牛窓港の「みなと文化」

金谷　芳寛

目　　次

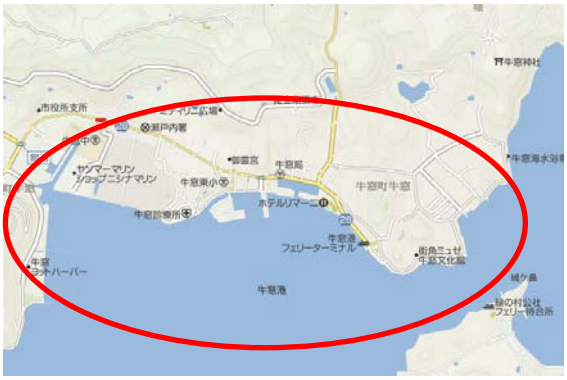
第１章　牛窓港の整備と利用の沿革 76-1
１．原始・古代の牛窓港 76-1
２．中世の牛窓港 76-2
３．近世牛窓港の賑わい 76-3
４．鉄道開通で衰退する明治・大正時代の牛窓港 76-6
５．観光産業へと傾倒していく昭和・平成時代の牛窓港 76-7

第２章　「みなと文化」の要素別概要 76-8
１．船を用いた交易・交流活動によって運び伝えられ、育ってきた「みなと文化」 ... 76-8
（１）航海安全のための祈願神社 76-8
（２）節句行事「ししこま」 76-8
（３）遠い異国の文化を運んできた朝鮮通信使 76-8
２．航路ネットワークを利用した地場産業の発達によって育ってきた「みなと文化」 . 76-10
（１）港湾関連産業 76-10
（２）港湾利用産業 76-12
３．港を介して蓄積された経済力に基づき、
人々の生活の中で育ってきた「みなと文化」 76-13
（１）江戸・京・大坂との交易と交流文化 76-13
（２）牛窓港を訪れた文人墨客 76-14

第３章　「みなと文化」の保存と振興に関する地域の動き 76-16
１．洋館群の活用 76-16
２．牛窓燈籠堂の再興と一文字波戸の修復 76-16
３．牛窓港の景観を生かした町づくり 76-17

〔主な参考文献〕 76-18

所在地：岡山県瀬戸内市	港の種類：港湾	港格：地方港湾



【位置図】

【現況写真（牛窓ヨットハーバーより）】
（(財)岡山県牛窓海洋スポーツ振興会 HP）

第１章　牛窓港の整備と利用の沿革

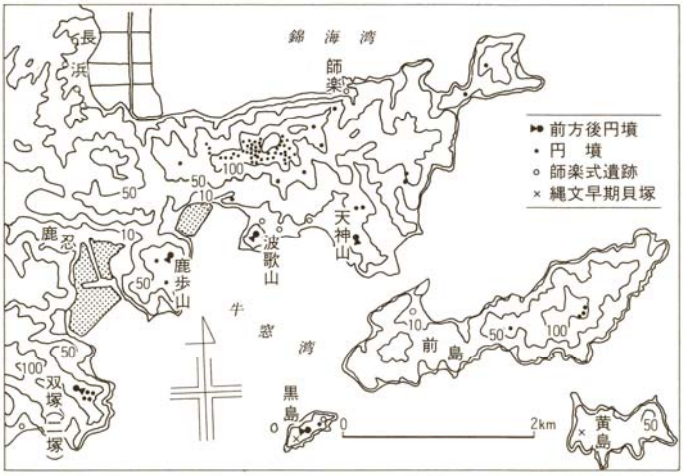
１．原始・古代の牛窓港

牛窓港は、瀬戸内海の港町として広く知られている。牛窓で人間生活が営まれるようになったのは、まだ瀬戸内海が形成されていない旧石器時代後期～晩期まで遡ることができる（前島網代崎遺跡など）。また、氷期が終わり、気候が温暖化して海面が上昇し、瀬戸内海が形成されたが（縄文海進）、それを証明する黄島貝塚・黒島貝塚などの遺跡も残されている。しかし、牛窓は平地が狭小で水利が悪く、水稲作には不向きな土地柄なので、水稲作を中心とした生活は考えにくく、弥生期の水稲作に関わる遺跡は牛窓湾内には存在していない。

牛窓港は一般的に中世より発展してきたと説明するものが多いが、実際には古墳時代には海運・交易の拠点として存在していたと考えられる。それを物語るのが牛窓湾を取り囲むように分布し、前方後円墳に代表される牛窓古墳群である。4世紀半ば～後半に築造された牛窓天神山古墳（約85m）、5世紀前半の黒島1号墳（約81m）、5世紀後半の鹿歩山古墳（約84m＋周壕）、5世紀末～6世紀前半の波歌山古墳（約60m）、6世紀後半の二塚山古墳（約55m）の前方後円墳をはじめ、大小の群集墳が湾内に分布し、そのどれもが港を一望できる丘陵の上に存在している。古墳の被葬者は、今日では吉備海部直一族とされている。

『日本書紀』によると、吉備海部直は天皇の命で新羅を討伐した赤尾や百済から日羅を連れ帰った羽島など、朝鮮半島と関わる箇所に登場する。彼らは朝鮮半島と交易をし、富を蓄積して、豊富な朝鮮半島の情報や知識を買われて朝廷に登用されたと思われる。事実、黒島一号墳からは朝鮮半島との関わりを示す陶質土器も出土している。長和4年（1015）の邑久郡少領の交代を申請する文書（「邑久郡司解」、『牛窓町史』資料編Ⅱ）には、「海宿禰」が「累代問地」とあり、海宿禰一族が郡司を世襲している。この一族の祖先が「海部直」と考えられ、牛窓湾周辺部を統治していたと思われる。また、『万葉集』巻11歌番号2731には、「牛窓の波の潮騒嶋響き寄られし君に会わずかもあらむ」と詠まれており、8世紀にはすでに瀬戸内海の重要な寄港地として、都にまで知られていた存在であったと考えられる。

古墳時代を中心に備讃瀬戸地域から出土する「師楽式土器」という製塩土器がある。これは、牛窓町牛窓師楽から大量に出土し、発見された当初は使用法がわからなかったが、その後の発掘の成果で製塩土器と判明した。今でもこの土器を「師楽式土器」と呼ぶのはこのためである。



【図1　牛窓湾周辺の遺跡（縄文～古墳時代）】
〔出所〕近藤芳郎『吉備考古点描』229頁。

２．中世の牛窓港

中世の牛窓は、瀬戸内海屈指の港町として繁栄していた。『兵庫北関入船納帳』（中央公論美術出版）は、文安2年（1445）の一年間、当時東大寺の支配下であった兵庫北関に入港した船の積荷に課税した収税台帳である。これによれば、牛窓の船は133艘も記録されている。この数字は、地元兵庫港の船を除くと最も多い数である。また、牛窓船の船籍地は、「関浦」・「泊」・「綾浦」の注記があり、「牛窓」が全体の総称（大字）として用いられている。「泊」だけが地名として残っておらずつまびらかではないが、牛窓の地形や本蓮寺文書に見える付近の地名などから現在の「中浦」付近に比定されている（竹林栄一「牛窓『泊』について」）。

『兵庫北関入船納帳』に見られるように、中世の牛窓の船稼ぎは極めて突出している。兵庫北関への入港数の多さだけではなく、積荷に関しても多種多様で、米・豆・大豆・小豆・大麦・小麦・蕎麦・かち栗・芋・山崎胡麻・樽・檜材木・海老・イカ・塩鯛・干鯛・鰯・アラメなどや瀬戸内各地で生産された塩というように、牛窓の産物ではないものが大量に含まれている。このことは、牛窓の船稼ぎが他国の産物を輸送する「中継貿易型」の商いであったことを示している。塩を例にとれば、島（小豆島）塩39艘・手島（豊島）塩2艘・小島（児島）塩26艘・引田塩1艘・タクマ（詫間）塩1艘・神島塩1艘・備後塩25艘と多様な産地の塩を輸送しており、より顕著である。また、備前国以外では備後国との結びつきが強く、嘉吉2年（1442）尾道から備後太田荘の年貢を運んだ船の中に牛窓の「いしわら道幸」の名がある（「備後太田荘年貢送附注進状」高野山文書、『牛窓町史』資料編Ⅱ）。この「いしわら道幸」は、当時牛窓保の地頭であったといわれている「石原但馬守道高」に名乗りが似ているため、この人物に比定する説もある。さらに、牛窓の本蓮寺本堂の屋根瓦の中にも「おの道孫四郎作也」・「おの道大工孫四郎」などの陰刻銘文が刻まれており、尾道の大工が作事に

関わっていることからも瀬戸内海の港町牛窓と尾道が密接な関係を持っていたことが窺える。

このほか東大寺に残っている『兵庫北関雑船納帳』（東大寺文書、同前）（文安元～2年）によれば、牛窓と兵庫北関間に客船が往来していたことがわかっている。こちらの史料は、入港船から1艘につき45文を徴収した入港税（置石料）を書き留めたもので、判読可能な525艘のうち5艘が牛窓船であり、うち4艘が「人船」と記されている。この「人船」とは当時の客船と考えられている。

南北朝時代末期の康応元年（1389）3月、室町幕府3代将軍足利義満が厳島神社を海路参詣した。その際復路は牛窓に寄港している。義満は、牛窓で備前国守護赤松氏の一族と思われる赤松右馬助の饗応を受けている（「鹿苑院殿厳島詣記」、『群書類従』第18輯）。

さらに、この当時は朝鮮との交流もあり、文明3年（1471）（朝鮮成宗2年）成立の『海東諸国記』（『牛窓町史』資料編Ⅱ）によれば、丁亥年（応仁元年）に「備前国卯島津代官　藤原貞吉」が朝鮮国へ遣使していることが判明しており、牛窓から朝鮮へ使節が送られていることは大変興味深い。また、「戊子入明記」（同前）によれば、応仁2年（1468）に牛窓の「田原丸　千斛(石)」が遣明船の1艘として候補に挙げられている。また、明応7年（1498）7月25日、幕府は尾道での唐船積荷を牛窓の「所質」（中世の貸借関係で、借り主が返済しない場合、それを取り立てるために貸し主が借り主と同じ所に所属する動産や人質を差し押さえる質取り慣行をいう）に取ることを禁止している（「室町幕府奉行人連署奉書案」黒田帯刀所蔵文書、同前）。このように中世の牛窓港は、国際交易都市としての側面を持ち合わせていた。

３．近世牛窓港の賑わい

（１）岡山藩による牛窓港整備

寛永年間（1624～44）、牛窓村は藩から「在町（ざいまち）」に指定されて、岡山城下と同じように商売自由とされている。岡山藩は、牛窓を海への備えと幕府役人や諸大名の接待港として位置づけ、積極的に港の整備を行った。まず、幕府の意向を受けて、寛永17年（1640）に「異国遠見番所」を設置して外国船の通行に備えるとともに、牛窓港の出入港事務や往来船を検察した「瀬戸番所」（船番所）、幕府や諸大名の通行船の警固のために邑久郡内の各浦々の「加子（かこ）」（水主）を徴発する「加子番所」を置いた。さらに、寛永19年（1642）には、それらを統括し牛窓の治安・警察をも担当する「牛窓湊在番所」を設置した。そして、藩主の休憩所兼接待所として「御茶屋」が置かれていたが、寛文9年（1669）に大規模な改築を行い、面目を一新している（倉地克直「牛窓御茶屋絵図について」）。延宝元年（1673）には、港の東側入り口にあたる牛窓瀬戸に灯籠堂を築いて付近の航行の便宜を図った(『池田家履歴略記』)。そして、元禄8年（1695）全長373間（678m）におよぶ「一文字波戸」を築造し、「波止の内船掛り吉」の良港となった（『備陽記』）。さらに、岡山城下から牛窓までを結ぶ牛窓往来が整備され、特別に飛脚制がしかれていた。

（２）町並みの整備と牛窓港の繁栄

江戸時代の牛窓村の町並みを表す言葉に「三町三ヶ浦」がある。岡山藩は、中世の「牛窓保」を港としての負担を考えそのまま一村とした。関町・西町・東町の「町分」と枝村であった中浦・綾浦・紺浦の「浦分」である（「備前国九郡之帳」池田家文庫）。関町と中浦と

の境となっていた本蓮寺下には、町分と浦分を仕切る「町口関貫」と呼ばれる木戸と番所が置かれた。西国大名や朝鮮通信使などを饗応する際の上陸に使われる「下行場（げぎょうば）」大雁木は、日常では一般民衆は使用できなかったと伝えられている。明暦3年（1657）～寛文2年（1662）にかけて大浦湾が開発されて大浦新田村ができ、ついで寛文元年には東町地内の裏町（奥之町）・出来町、さらに寛文11年（1671）には生田の造成が行われて町分が東側に大きく拡張され、材木問屋や船宿、船大工などが集住した。江戸中期以降は、関貫外の中浦以西の浦分にも商人が増え、牛窓往来沿いに商家が立ち並んで発展した。

また、庄屋や年寄（元禄2年以降唱え替えで、それぞれ名主、五人組頭と改められる）は町分からのみ就任し、奈良屋那須家と中崎屋東原家は世襲であった。江戸中期以降は、名主・五人組頭は2、3名ずつの体制となっている。また、村政は名主・五人組頭・大判頭（一般に五人組頭に相当する判頭20人に1人置かれる）の惣寄合で合議された。

【写真1　邑久郡牛窓村見取絵図（部分拡大）】

※『牛窓町史』資料編Ⅰに収録されている「邑久郡牛窓村見取絵図」（池田家文庫）に、筆者が牛窓港の主な施設名を付した。

西廻り航路が開かれ商品流通が拡大されてくると、牛窓港は廻船の寄港地、あるいは領内産物の積み出しや他国産物の移出港として繁栄していった。繰綿問屋・他国米商・両替商・材木商などが軒を並べて問屋稼ぎで賑わった。特に材木商は九州・四国地方へ「牛窓杣（そま）（樵）」を派遣して山々から材木を切り出し、良質の材木を仕入れたため造船業も成立した。牛窓船籍の廻船の活動も活発であり、藩の船手の記録によると、延宝元年（1673）には日向国油津（宮崎県日南市）を出港し、「舟材木」を積んだ牛窓村権助船が日向国細島沖で破船している（池田家文庫「御留帳御船手」延宝元年）。また、延宝5年（1677）には助三郎船が江戸からの帰路、伊豆小浦沖（静岡県南伊豆町子浦）にて大波にあい「御家中之荷物」121個の

うち21個が「濡荷物」となった（「同」延宝5年）。さらに、佐渡国加茂郡真更川村（新潟県佐渡市）に入港した廻船を書き留めた「諸廻船入津留帳」（土屋三十郎家文書、享保10年～寛政10年までの74年間を記載）によると、備前国の船15艘のうち牛窓船が7艘・尻海船が6艘を占めており、船の大きさも13～16人乗の大規模廻船であった（上村雅洋『近世日本海運史の研究』）。このほか石見国浜田外ノ浦（島根県浜田市）の廻船問屋清水屋に残る『諸国御客船帳』（清水三次郎氏所蔵文書、延享元年（1744）～明治34年（1901）まで記載）によると、明和3年（1766）～安永8年（1779）の間に木屋・神坂屋・板屋の船合計4艘が記されているなど、牛窓の船は遠く日本海側や太平洋側の航路でも船稼ぎしていたことがわかる。

（３）藩の経済政策と牛窓港の盛衰

江戸時代の牛窓村の村況を示す史料（表1）を見ていくと、享保頃が繁栄の頂点であったことがわかる。享保6年（1721）の『備陽記』によれば、人口4,241人、家数883軒、船数（小猟船から19反帆まで）165艘、うち廻船の数（950石より500石積まで）13艘であった。村の大きさや耕地に比較して人口・家数とも多いことから俗に「牛窓千軒」と称された所以である。衰退してくるのが文化頃で、文化6年（1809）の「牛窓旧記」（岡国太郎家文書、『牛窓町史』資料編Ⅱ）によれば、人口2,979人、家数841軒、船数（2反帆～4反帆まで）147艘と人口の激減と船の小型化が目立つ。特に大型廻船が激減しており、港の衰退が窺える。

さらに、船数の動向で見ていくと、廻船の拠点が近隣の尻海村（瀬戸内市邑久町尻海）に移っている。廻船数を先出の『備陽記』で比較すると、享保期には牛窓村の13艘に対して尻海村は（950石より500石まで）16艘とほぼ拮抗している。しかし、後の天保12年（1841）の「御船数御家中船数町浦辺船数、同大船数運上高書付」（池田家文庫）では、10反帆以上の船を見ると、牛窓村は13反帆（350石）1艘のみであるが、尻海村は32反帆（1,900石）1艘、30反帆（1,950石）1艘、26反帆（1,450石・1,300石・1,200石）3艘、19反帆（740石）1艘の合計6艘もあることが注目される。

【表1　江戸時代の牛窓村の村況】

時代	人口	家数	田畑畝数	廻船数	船　数	出　所
元禄期	3,980人余	849軒	134町余			『備前記』（元禄17年）
享保期	4,241人	883軒	122町5反5畝11歩半	13艘（950石～500石）	小猟～19反帆まで165艘	『備陽記』（享保6年）
文化期	2,979人	841軒	133町3反6畝28歩半		2反～4反帆まで147艘	「牛窓旧記」（文化6年）
嘉永期	2,967人	760軒	138町1反3畝10歩半		小猟～7反帆まで184艘	「邑久郡大手鏡」〔池田家文庫〕（嘉永年間）

このように何故牛窓が衰退してしまったのかを示す史料は少ないが、結論からいえば前述のように近隣の尻海村の廻船との競争に敗れ、自前の廻船群が解体してしまったことと、藩財政逼迫による米価高値維持や飢饉対策などを目的とした藩の他国米売買禁止政策、さらには「沖乗り」航法の常用などの航海技術の進歩による廻船の入港数減少に原因があると思われる。

明和3年（1766）、牛窓村・下津井村・吹上村の他国米商が他国米を扱うことができるよう共同請願している（『撮要録』）。これによれば、牛窓村は、先年は大船持をはじめ九州表へ木山仕入のため、船加子（水主）や木山日雇として九州へ出稼ぎする者が多く、問屋職も板材木・油糟・肥干加・そのほか塩肴等があり繁盛していたが、藩の他国米売買禁止政策によって入港する九州・北国方面の船の多くは、油糟と他国米とを合わせて積んでいるため、港は「牛窓村相応の商い物」を積んだ船も牛窓港を敬遠するような状態となっている。藩はこの請願を受けて、3月より7月まで「他所米売買御免」とし、冥加金を米1石につき銀6厘ずつ上納することとしたが、明和4年の冥加金は、下津井・吹上村は1貫493匁8分1厘に対して牛窓村は29匁8分しかなく効果は少なかった（同）。さらに、安政元年（1854）には、先年の凶作と幕府に命令された房総警備の戦費調達のための藩札の大量発行などが原因で藩札の信用は失墜し、「安政の札潰れ」が起こった。札場での銀への換金が滞ったほか他国米売買も停止され藩経済は破綻混乱し、牛窓港も大きく衰退している。江戸時代の牛窓港の盛衰は、藩の経済政策によって大きく左右されたともいえるだろう。

４．鉄道開通で衰退する明治・大正時代の牛窓港

明治以降牛窓港は、岡山県下の主要港として大きく発展した。藩政時代のように藩から様々な規制を受けることがなくなったからである。明治13年（1880）の『岡山県統計表』には、商売戸数85戸、商船出船1,097隻、入船21,600隻、物貨出額80,000円、同入額400,000円、定繁船250隻が記載されている。船舶出入数では2位、物貨出入数でも3位を占めていた。しかし、牛窓港周辺部に鉄道が開通しなかったため、岡山県下の鉄道網の形成とともに徐々に地位を低下させていった。山陽鉄道（現山陽本線）が開通した明治23年（1890）には、県下主要移出地中7位、大正期以降は県下上位10位以内には登場しなくなる（神立春樹『産業革命期における地域編成』）。旧牛窓町役場文書の統計史料を分析すると、明治40年と大正8年が牛窓港の移出入のピークで、それ以外は低下したままである。特に材木だけを残して、江戸期の特徴であった中継地的な性格はほとんどなくなっている。明治後期～大正期にかけて牛窓港へ支線を延ばす軽便鉄道が度々計画されたが、いずれも鉄道計画は実現されることなく終わった。

牛窓港の文明開化は、第3代町長を務めた香川真一（1835～1920）の功績によるところが大きい。彼は岡山藩士の家に生まれ、明治2年（1869）に岡山藩議長、2年後には岩倉具視の一行に従って欧米を視察、明治11年（1878）には大分県令に就任したが、翌年県令を辞して牛窓村に転居し、幅広い見識を生かして岡山県の近代化を政界・実業界の両面から牽引していった（『岡山県歴史人物事典』）。明治36年（1903）～大正6年（1917）までの長きにわたり牛窓町長を務めたが、私財を投げ打って警察署や町役場（現存せず）、牛窓銀行本店などの建築を手がけ、近代的社会基盤を整備していった。

【写真2　吉田初三郎「景勝之牛窓町」】〔昭和9年（1934）〕　瀬戸内市教育委員会提供

５．観光産業へと傾倒していく昭和・平成時代の牛窓港

昭和初期には浦分の埋め立て開発による町の大規模な拡張整備が行われ、綾浦を中心に専売局の倉庫群や水産試験場、あるいは工場の建設などが行われた。さらに戦後の高度成長期は、集中的に牛窓港の港湾施設の近代化が図られた。昭和31年（1956）には鉄筋コンクリート製の県営桟橋（綾浦荷揚場）、同35年（1960）には物揚場新設（関町）、同38年には牛窓西港の改修工事などが着手されたが、衰退化には全く歯止めがかからなかった。昭和36年（1961）には入港船舶数が59,000隻あったものが昭和62年（1987）には900隻となり、さらに平成19年（2007）には147隻まで激減した（『岡山県統計年報』・『県政のしおり』）。

牛窓町の観光産業への転換は、すでに戦前期の昭和9年（1934）に瀬戸内海国立公園に選定された頃から見られはじめるが、港と造船をはじめとする港関連産業の衰退からより顕在化することになった。昭和39年（1964）に牛窓町と阪神電鉄との間で観光開発協定が結ばれ、以後積極的に観光産業へと転換していった。昭和51（1976）にはギリシャのミティリニ市と姉妹都市縁組みを結び、牛窓オリーブ園と瀬戸内海の多島美を「日本のエーゲ海」として売り出している。さらに、平成3年（1991）には県営牛窓ヨットハーバーやマリンリゾートホテルなどを誘致するなどしたが、観光客は平成6年（1994）の649,500人を最高に減少し続けており、先年の阪神電鉄の撤退問題などもあって、もう一度地域の歴史・文化などを生かした街づくりを再構築しなければならない時期になっているということがいえるだろう。

第２章　「みなと文化」の要素別概要

１．船を用いた交易・交流活動によって運び伝えられ、育ってきた「みなと文化」

（１）航海安全のための祈願神社

①金比羅宮（西町）

江戸時代に牛窓村名主那須助三郎（奈良屋・廻船材木問屋・本陣）による寄進によって整備された神社で、文政2年（1819）本殿、天保11年（1840）幣殿・拝殿が相次いで建立され、嘉永元年（1848）には鳥居が建立されるなど約30年もの歳月かけて整備された。奈良屋一族をはじめ、牛窓港の廻船業を営む者や漁師などから厚く信仰された。往古は、船絵馬がたくさん奉納されていたというが、現在は一枚も伝わっていない。

②五香宮（本町）

牛窓の地名伝説にまつわる神社で、往古は住吉大明神（住吉宮）であったが、寛文6年（1666）岡山藩主池田光政の寺院淘汰により、塔頭の妙福寺観音坊と一体と見なされて破却された。翌年誤りに気づいた藩主光政は、京都伏見の御香宮から神功皇后と応神天皇を勧請して「五香宮」として再建し、牛窓八幡宮と合わせて社領20石を寄進した。以後、武運長久・子宝安産・航海安全に御利益があるとされ、藩主一族をはじめ牛窓の人々から崇敬を集めてきた。

（２）節句行事「ししこま」

「ししこま」とは、米粉を練ってこれを蒸し、臼でついて山の幸・海の幸をかたどった団子にし、色粉で彩色したもので、女の子が生まれた初めての八朔（旧暦8月1日）に作り、雛壇に供えるとともに、近所の子供たちに貸していた（女の子が生まれたときには同じものを作って返す）。もらってきた子供たちは、2、3日のうちに食する。かつては牛窓港全体で行われてきた風習であったが、現在では西町地区のみ伝わっている。

【写真3「ししこま」】（瀬戸内市教育委員会提供）

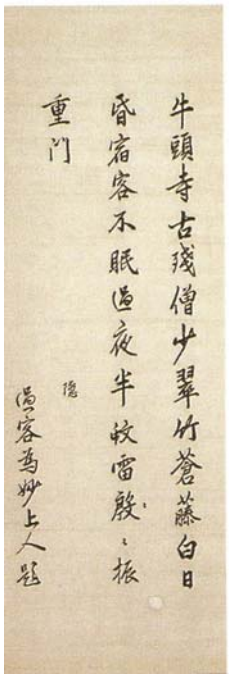
（３）遠い異国の文化を運んできた朝鮮通信使

江戸時代は幕府によって厳しい「海禁」政策がとられており、日本人の海外渡航が禁止されたことはもちろん、外国船の来航も長崎に限られていた。そのような時代の中で人々が「異国」に直接触れることができる貴重な機会の一つに朝鮮通信使があった。幕府にとって朝鮮通信使は、将軍の代替わりにあたって将軍が日本の統治者であることを内外に誇示する重要な行事であった。通信使の接待は、陸路・海路とも沿道の各藩に命令され、現在の岡山県域では岡山藩が接待にあたった。接待に関する内容を簡略に示すと、鞆津（現広島県福山市）～牛窓～室津（現兵庫県御津町）間の送迎と警固、牛窓での接待、接待の経過を幕府に報告することなどであった。江戸時代の朝鮮通信使は、計12回日本に来航したが、牛窓で正式に接待が行われたのは、寛永元年（1624）～明和元年（1764）までの9回におよぶ。通信使は10～30年間隔でやってくるので、単純に考えると海岸沿いの村人であれば、一生に一度は通

信使を見ることができたことになる。

通信使の編成は、正使・副使・従事官の三使のほか堂上訳官（上々官）・製述官（文才官）・書記・通辞・画員・軍官・典楽・陪童などの300～500人程度の規模であるが、これに案内の宗対馬守一行を加えると1,000人以上にのぼった。通信使一行は釜山から出航し、対馬の府中に至り、壱岐・藍島・赤間関（下関）をたどって瀬戸内海に入る。そして、上（山口県）・蒲刈（広島県）・鞆津（同）・牛窓（岡山県）・室津（兵庫県）・兵庫（同）に入港して大坂に至る。さらに大坂からは、西国大名が用意した川御座船で淀川を上り、京都から東海道を江戸へと向かった。沿道の各藩では、幕府の命令を受けて警固を厳重にし、接待所（御馳走所）では盛大な饗応が行われていた。

牛窓での饗応は、明暦元年（1655）までは本蓮寺、天和2年（1682）からは御茶屋を改築してあてられた。三使以外の一行や接待にあたる藩の役人には町屋があてられている。享保4年（1719）を例にとると、御茶屋のほか「関貫」内側の町屋20軒が通信使の宿所、宗対馬守一行の宿所に町屋25軒があてられた。接待にあたる岡山藩の役人は総勢336人、さらに民間人の料理人や髪結など252人が動員され、町屋146軒があてられた。このうち通信使一行が宿泊する町屋の住人は、来航から帰港まで退去を余儀なくされて家に立ち入ることを禁止されている。また、警固に動員された船の数は、藩の船105艘、民間の浦船838艘、加子（水主）として動員された人々は3,855人にのぼっている（倉地克直「朝鮮通信使と牛窓」）。通信使と民間人との接触は禁止されていたが、藩の儒学者との交流が宿所でさかんに行われ、唱酬筆談記録が多数残されている。宿所となった本蓮寺には、通信使一行が残した漢詩書軸8幅が大切に伝えられている。



【写真4　朝鮮通信使漢詩書軸】
（従事官申濡（竹堂）筆）
〔出所〕『牛窓と朝鮮通信使』より

【写真5　朝鮮通信使に因んだイベント「朝鮮通信使行列」】
（11月のエーゲ海フェスティバルで行われる。）

【表2 江戸時代の朝鮮通信使一覧】

西暦	日本	正使	副使	人員	来聘理由	牛窓到着・出発・接待場所（往路）	牛窓到着・出発・接待場所（復路）
1607	慶長12	呂祐吉（擬渓）	慶暹（七松）	504	修好、回答兼刷還等	4月5日着、食事後発	閏6月14日通過
1617	元和3	吳允謙（楸灘）	朴梓（雲渓）	428	大坂平定の賀、回答兼刷還等	8月15日通過	9月19日着船泊、20日民家泊、21日発
1624	寛永元	郭㙔	姜弘重（道村）	460	家光襲職祝賀、回答兼刷還等	11月8日着、9日発、本蓮寺	1月30日着、2月1日発、船泊
1636	寛永13	任絖（白麓）	金世濂（東溟）	478	泰平の賀、朝鮮政策の確認等	11月6日着、7日発、船泊	2月5日着、6日発、船泊
1643	寛永20	尹順之（幸溟）	趙絅（龍洲）	477	家綱誕生の賀、友好保持等	5月30日着、6月1日発、本蓮寺	9月13日着、上陸食事後船泊、14日発
1655	明暦元	趙珩（翠屏）	兪瑒（秋潭）	485	家綱襲職祝賀	8月25日着、26日発、本蓮寺	12月22日通過
1682	天和2	尹趾完（東山）	李彦綱（鷺湖）	473	綱吉襲職祝賀	7月21日着、22日発、御茶屋	10月9日通過
1711	正徳元	趙泰億（平泉）	任守幹（靖庵）	500	家宣襲職祝賀	9月11日着、12日発、御茶屋	12月27日着、28日発、御茶屋
1719	享保4	洪致中（北谷）	黄㫜（鷺汀）	475	吉宗襲職祝賀	9月1日着、2日発、御茶屋	11月17日通過
1748	延享5	洪啓禧（澹窩）	南泰耆（竹裏）	477	家重襲職祝賀	4月17日着、19日発、御茶屋	7月9日通過
1764	明和元	趙曮（濟谷）	李仁培（吉庵）	477	家治襲職祝賀	1月13日着、14日発、御茶屋	5月15日着、16日発、船泊
1811	文化8	金履喬（竹里）	李勉求（南霞）	328	家斉襲職祝賀	対馬で交聘	対馬で交聘

〔出所〕『港町牛窓』・『牛窓町史』史料編Ⅱから作成。

２．航路ネットワークを利用した地場産業の発達によって育ってきた「みなと文化」

（１）港湾関連産業

①造船業

牛窓港の特徴ある産業の一つに造船業がある。牛窓の造船業の歴史は古く、記録では近世初頭まで遡ることができる。慶長11年（1606）、角倉了以が京都大堰川を開鑿して丹波の物資を運ぶことを計画した際、了以の知人であった日蓮宗の僧侶日禎の仲介で牛窓の船大工や船頭が呼び寄せられたと伝えられる（『嵯峨誌』）。牛窓の造船業は、岡山藩の船手組織の末端に組み込まれており、船大工・木挽・船鍛冶などの諸職人たちは、船大工頭のもとに株仲間である「船座」に編成されていた。文政年間には、船大工頭平兵衛（大黒屋）がいたことが記録に残されており、彼の配下には150余名の船大工と300人を超す木挽がいたとされる。藩主から五香宮近くの東町字新町側に屋敷地と「宮脇」の姓を頂戴し、名字帯刀御免で、牛窓瀬戸の燈籠堂の管理も任されていた（刈屋栄昌『牛窓風土物語』）。

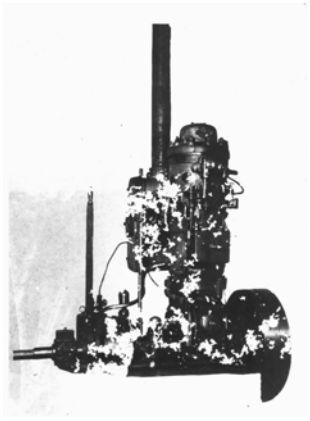
明治以降、牛窓港は阪神地方に近いという地の利から港湾艀（はしけ）を大量に受注するようになっ

た。明治38年（1905）12月1日の『山陽新報』によると、港全体で180艘もの艀を大量に受注している。このように牛窓港の造船業が活況を呈することによって、富を蓄積してきた材木商が造船業へと進出し、大規模な造船所を設立した。明治40年（1907）岡材木店（松屋）は造船部（のち岡造船鉄工所）を、大正6年（1917）には東服部合資会社（若葉屋）が造船部（のち牛窓造船所）を設立して、機帆船時代の牛窓造船界を牽引していった。戦時中は国内の船腹不足により木造船業は軍需産業に位置づけられ、軍用艀や戦時標準船が作られた。

しかし、戦後の高度経済成長以降の交通体系の変化に伴い、海上交通は鉄道やトラックなどの陸上交通に主役を奪われたことにより衰退していった。政府の船腹調整や小型鋼船化の政策もあり機帆船の建造も途絶え、鋼船建造に移行した造船所も造船不況とあいまって次々と廃業に追い込まれた。小型漁船においても耐久性に優れた強化プラスチック製の「FRP船」が登場するなど、木造漁船の建造も減少してきているが、まだ数件の造船所が頑張っており、牛窓船大工の伝統は今でも生き続けている。

②船舶用エンジンの製造

牛窓での船舶エンジンの製造は、大正7年（1918）の馬場常二によるセミ・ディーゼルエンジン（焼玉機関）の改良特許が嚆矢で、岡材木店が大正10年（1921）に牛窓鉄工所を設立してこれを量産した。さらに、昭和初期にはキサキ工作所や中国鉄工合資会社などが相次いで船舶エンジンの量産に入った。中でもキサキ工作所は、戦時中シンガポール・マレーシア・タイなどの占領地域へ製品を輸出して発展していった。

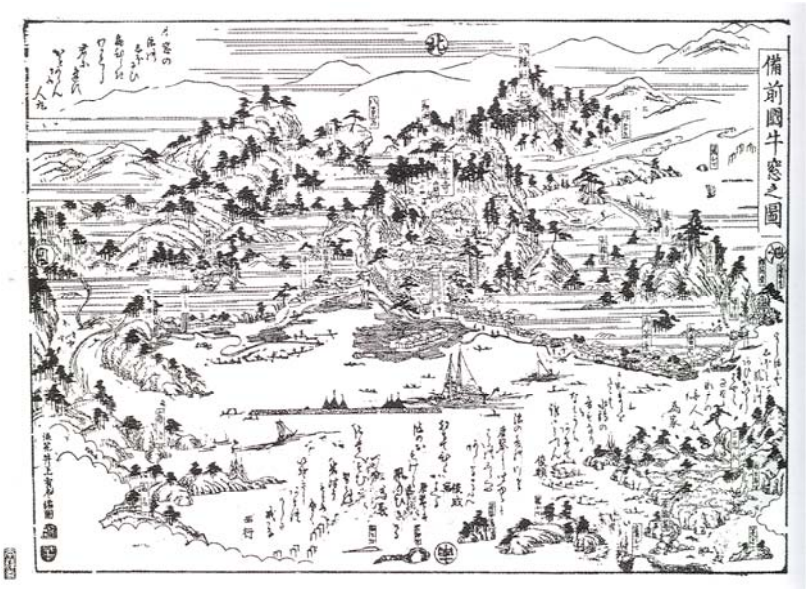


【写真8 牛窓の造船関連産業】

左上　牛窓鉄工所製セミ・ディーゼルエンジン（焼玉機関）〔岡国太郎氏所蔵〕
右上　大正頃の船おろし（進水式）〔岡国太郎氏所蔵〕
左下　昭和20年代の機帆船の船おろし（進水式）〔矢吹章氏所蔵〕
右下　昭和40年頃の造船業で賑わう牛窓港

③材木商

材木商の商取引も「弁甲杉」などの造船材を中心に活発であった。寛文10年（1670）の藩の記録では「牛窓ニそま六百人程御座候、毎年大隅・薩摩・日向へ参候」（池田家文庫「御留帳」上、寛文10年）とあり、早くから牛窓の材木商が派遣した「牛窓杣（樵）」が九州諸国で木山稼ぎを行っている。彼らの中には出稼ぎ先で土着する者もいたと思われ、高知県安芸郡田野町には「牛窓」姓を名乗る人々がおり、彼らの先祖は牛窓杣であったと伝えられている。また、正徳2年（1712）の「日向国臼杵郡黒木村指出帳」（黒木善道所蔵『宮崎県史』史料編近世3）によれば、延岡藩の御林であった「恵超寺山・より木平・うの須山」の三カ所の伐採を請け負ったのは牛窓の材木商備前屋六兵衛であった。



【写真9「備前国牛窓之図」(本蓮寺所蔵)】（材木の取引で賑わう江戸時代の牛窓港）
〔出所〕『牛窓町史』資料編Ⅱより

江戸時代を通じて牛窓に材木問屋を営む者がどれくらいいたのか窺える史料は少ないが、嘉永6年（1853）に材木の入札方法を定めた「申談議定覚」（岡国太郎家文書、『牛窓町史』資料編Ⅱ）によれば、若葉屋平兵衛・松屋吉兵衛・松屋八郎兵衛・木屋五郎左衛門・梶屋平五郎の五軒が確認できる。材木取引の送り状などを見ると、取引の商圏は上方・九州・四国など広範囲で、中でも大坂長堀の熊野屋三郎兵衛との取引は密接で、牛窓港の社寺には熊野屋が寄進した石燈籠や狛犬が残る。戦後、「弁甲杉」を中心とした造船材の需要の減少から材木商も廃業が相次ぎ、港の貯木場にたくさんの材木が浮かんでいた面影は今はない。

（２）港湾利用産業

①種子用馬鈴薯の栽培

明治30年代後半頃、関町で青物問屋を営んでいた高祖正平（屋号カネナカ）が大阪の商社から薄赤色の種子用馬鈴薯「アーリローズ」を取り寄せ、山本倉蔵と祇園弥平に栽培を委託し、成功したのが栽培の始まりとなった（『牛窓町史』（民俗編）・刈屋栄昌『牛窓風土物語』）。以後、田植え前に収穫できる商品作物として定着し、牛窓を代表する移出農産物と

なった。牛窓港からは船で宇野港からは鉄道で、瀬戸内海沿岸や京阪神、遠くは関東・東北へと種芋として出荷された。昭和22年（1947）の統計では、出荷量は3,404トン、出荷額は8,912,346円を記録している（昭和23年「港湾調査関係書類」旧牛窓町役場文書）。昭和40年代以降は、重量野菜の作付けへとシフトが進み、キャベツ・カボチャ・白菜などが栽培されており、トラック輸送で京阪神方面へ出荷されている。

３．港を介して蓄積された経済力に基づき、人々の生活の中で育ってきた「みなと文化」

（１）江戸・京・大坂との交易と交流文化

材木や米などの取引で京・大坂市場と密接に結びついていた牛窓港には、直接上方文化が流入してきた。牛窓の問屋商人は、商いで得た富を寺社や祭礼に惜しみなく注いだ。

①寺社文化

1）絵画

・牛窓神社所蔵　絵馬「御陰参りの図」文政13年（1830）　県指定重要文化財
　牛窓八幡宮神官井上文明作
・牛窓神社所蔵　絵馬「張飛長坂の戦い怒声の図」文久2年（1862）
　狩野永朝（京都狩野派）作
・室谷山金剛頂寺真光院　本堂内陣天井画「雲龍図」文政11年（1828）
　大坂浪華　月居鶴山作　　本堂建物は瀬戸内市指定文化財

【写真6　絵馬「御陰参りの図」（写真は複製）】（岡山県指定重要文化財）

2）石像物

・室谷山金剛頂寺真光院　本堂前石灯籠一対　天保2年（1831）
　若葉屋平兵衛（東服部家）　大坂長堀　熊野屋三郎兵衛　奉納
・牛窓天満宮（天神社）本殿前狛犬一対　文政7年（1824）
　大坂長堀　熊野屋三郎兵衛　奉納

②祭礼文化

1）牛窓秋祭り（牛窓神社秋季例大祭）

牛窓秋祭りとは、牛窓神社の秋季例大祭と御霊社（綾浦）・疫神社（紺浦）などの氏神の祭りの総称である。かつては毎年10月23・24日が縁日であったが、社会的諸事情から10月第

4日曜日に行われている。祭礼当日は、江戸～明治時代初期に建造された牛窓地区の5基の船形だんじりや2基の太鼓台、さらに綾浦の御霊社では太刀踊が、紺浦の疫神社では唐子踊が奉納され、終日町内全体がお祭りムード一色になる。牛窓神社の古記録によれば、中世にはすでに御神幸は成立していたと考えられ、永禄年間に海賊衆の焼き討ちにあい中断されていたものが、延宝4年（1676）、2代藩主池田綱政によって池田家の武運長久を祈願する祭礼として復興されている。岡山藩では藩祖池田光政以来、祭礼は領民の華美や奢侈につながるとして厳しく抑制する政策をとっていたが、岡山城下の東照宮祭礼とならんで例外的に許可されている。このため、祭礼も東照宮祭礼にならって行われたので、祭礼を通じて江戸文化も流入してきた。

【写真7　牛窓秋祭り】

左上　牛窓神社御神輿〔文政8年（1825）〕　　右上　関町だんじり〔弘化2年（1845）〕
左下　紺浦　唐子踊（山下卓男氏撮影）　　右下　綾浦　太刀踊（瀬戸内市教育委員会提供）

（２）牛窓港を訪れた文人墨客

①井伏鱒二（1898～1993）

昭和49年（1974）、鱒二は風邪を悪化させて気管支炎を煩った。このため岡山の親戚に手紙を送り、排気ガスがなく温暖な場所で、療養できる宿を紹介してくれるように頼んでいる。そして、親戚から牛窓を紹介された鱒二はバスに揺られて牛窓へ。牛窓港を見下ろす高台にあった国民宿舎に宿泊して療養する。毎日診察してもらった開業医の菅田医師や新聞を買うために通った新聞屋の岡崎さんなど、療養中に過ごした牛窓の人々とほのぼのした日常と心

のふれあい、面白おかしく聞かされた昔話など自らの実体験をもとに翌年随筆「備前牛窓」をまとめ、『新潮』昭和50年（1975）6月号に発表した（『井伏鱒二全集』第14巻）。平成元年（1989）、奇しくも鱒二原作の映画『黒い雨』（今村昌平監督）が牛窓港とその周辺部でロケが行われている。

②竹久夢二（1884～1934）

大正浪漫の美人画で有名な竹久夢二は、邑久郡本庄村（現瀬戸内市邑久町）出身で、明治32年（1899）に神戸の叔父宅に寄宿するまでの幼少期に度々牛窓港を訪れていたようである。牛窓町牛窓西町のとある商家に叔母が嫁いでいた関係であったらしい。夢二が大正4年（1915）に著した『くさのみ』には、遠い日の記憶を頼りに「夏祭りの夜」と題して牛窓港の祭りの様子や嫌々ながら嫁がねばならなかった叔母の家の隣人の娘の様子などが夢二の感じられたまま綴られている（『竹久夢二文学館』4）。他に夢二が書いた詩の中に、海に関係したものがあるが、それらも幼少期に度々訪れた牛窓港が原風景であろうといわれている。また、牛窓神社拝殿には他数の絵馬が奉納されており、夢二は牛窓に来ると必ず訪れて絵心を養った場所だと言い伝えられている。

③山本憲〔梅崖〕（1852～1928）

土佐藩出身の漢学者で、自由民権運動を推進するため『大阪新聞』記者、『岡山稚児新聞』の主幹となり岡山に移住した。のち小林樟雄や満藤恒らと克明社の『中国日日新聞』創刊に協力、その克明社が山陽自由党に組織替えしてからは、岡山を拠点に自由民権運動を積極的に活動した。明治15年（1882）大阪に漢学塾「梅清処塾」を開く一方、自由党のために奔走したが、小林樟雄と金玉均らと朝鮮独立の企てが失敗し（「大阪事件」）、5年間入牢した。明治22年（1889）憲法発布の特赦により出獄、以後政界とは絶縁し、塾生の指導に専念する。明治38年（1905）東服部家4代目当主服部平兵衛信昌に招かれて牛窓に隠棲し、漢詩の結社「淡成社」を作り、詩会を開いて『淡成社吟集』を刊行した（『岡山県歴史人物事典』）。ほかに『梅清処文鈔』・『梅清処詠史』・『四書講義』などがある。また、牛窓内外の記念碑の碑文を揮毫しているほか、牛窓周辺の名望家や政治家にも思想面で大きな影響を与えている。

【写真10　山本憲（梅崖）】

【写真11　梅清処塾（『梅崖先生年譜』より）】

第３章　「みなと文化」の保存と振興に関する地域の動き

１．洋館群の活用

①海遊文化館（旧牛窓警察署本館庁舎）

明治20年（1887）、西大寺警察署牛窓交番所が西大寺警察署牛窓分署への昇格にともない建設された建物で、香川真一ら郡内有力者20余名の寄付金によって費用が賄われた。設計者は建築委員長である香川真一、大工は地元の森国吉である。建築以来昭和52年（1977）まで使用されたが、警察署の新築移転に伴い平成4年（1992）からは朝鮮通信使の資料や牛窓だんじりを展示する「海遊文化館」として活用されている。平成10年（1998）には国の登録文化財に指定されている。因みに敷地は江戸時代の宗対馬守本陣屋敷跡地である。

②街角ミュゼ牛窓文化館（旧牛窓銀行本店）

大正4年（1915）に株式会社牛窓銀行が建てた銀行建築で、以後数回の合併を経て中国銀行牛窓支店となった後も昭和55年（1980）まで65年間使用された。香川真一が関わった3棟のうちの1つで、設計は山村精一、大工は地元の森国吉。外壁はドイツ製の煉瓦タイルが使用されている。銀行建築に特有の鎧戸や金庫として使用された土蔵も当時のまま残されている。平成9年（1997）国の登録文化財に指定され、地域の豊かな歴史文化を保存・公開・活用・伝承する館として活用されている。

【写真12　海遊文化館】
（旧牛窓警察署本館庁舎）

【写真13　街角ミュゼ牛窓文化館】
（旧牛窓銀行本店）

２．牛窓燈籠堂の再興と一文字波戸の修復

①燈籠堂

明治以降燈籠堂は廃絶されたが、基台はそのまま良好な状態で残っていた。牛窓町は、昭和57年（1982）跡地を町指定の文化財に指定するとともに、昭和63年（1988）には『金毘羅参詣名所図絵』等の資料を参考に建物が復元された。

②一文字波戸

一文字波戸は、元禄8年（1695）岡山藩によって築造されてから300年以上にわたって牛窓港を風波から護ってきた。全長678m、幅2.7mもの長大な防波堤で、工期はわずか10ヵ月で造られた。以後度々修築されてきたが、現在築造当初の部分は海中に埋没しており、現在見える根石部分より上側は昭和26年（1951）の大修築後のものである。平成4年（1992）から継続的に行われてきた「平成の大修築」は、周囲の歴史的景観に配慮がなされ、全体を石積

みで行う工事が行われた。

【写真14　唐琴の瀬戸（牛窓瀬戸）と燈籠堂】

【写真15　工事中の一文字波戸（2007.2.16）】

３．牛窓港の景観を生かした町づくり

「日本の夕陽百選」の認定と牛窓新八景

平成17年（2005）、NPO法人日本列島夕陽と朝日の郷づくりの会は、牛窓港、牛窓天満宮（天神社）、前島大坂城築城残石群の展望台3カ所の眺望点を「日本の夕陽百選」に認定した。以後、牛窓港の景観への関心が高まり、景観を積極的に取り入れた町おこしや新たな観光素材の発掘が瀬戸内市観光協会を中心に進められている。平成19年（2007）には、戦前に名勝であった黒島の「砂の浮橋」を復活。大潮の日だけに現れる黒島から隣の小島へつながる美しい半月状の陸けい砂州を見学するツアーの様子は、地元テレビ放送局の特集にも取り上げられた。さらに、翌年にはそれらの眺望点や名勝を含めて平成の「牛窓新八景」が観光協会によって制定された。これは、戦前期牛窓港一帯が国立公園に指定された頃に「牛窓八景」が制定されていたが、高度成長時代の開発などで景観が失われてしまった。これを新たな眺望点や名所を取り入れることによって現代に復活させたもので、港の景観を生かした新たな試みも進められている。

【写真16　マリンリゾート開発が進む牛窓港】

【写真17　牛窓オリーブ園からの眺望】

〔主な参考文献（注記したもの以外略記）〕

・『牛窓町史』通史編
・『岡山県史』中世ⅠⅡ・近世Ⅰ～Ⅳ　山陽新聞社
・『岡山県の地名』（平凡社日本歴史地名大系34）
・『港町牛窓』（岡山県立博物館　平成6年度企画展図録）
・『池田家文庫藩政史料マイクロ版集成』（岡山県立記録史料館所蔵）丸善
・『港町備前牛窓』（岡山地方史研究会平成13年度夏季巡見冊子、瀬戸内市教育委員会学芸員若松挙史氏と筆者が執筆）
・「旧牛窓町役場文書」（瀬戸内市教育委員会所蔵）

写真は注記したもの以外は、筆者撮影もしくは所蔵によるものである。